

師に教わりしことをここに灯し続け

中井 弘一

教職科目を学生に教える際に今更ながらではあるが、教員に望まれる資質・能力とは何であろうか、学生にどう教えれば良いであろうかと思うことがある。

教員採用時に大阪府が求めている教師像を大阪府教育委員会HPを見ると、子どもが好きであることを前提に、子どもに共感できるかどうか、子どもに向き合っていく情熱、真剣さを有する「豊かな人間性」、幅広い識見や主体的・自律的に教育活動に当たる姿勢などの「実践的専門性」、保護者や地域の人々と相互連携を深めながら、信頼関係を築き、学校教育を通して家庭や地域に働きかける「開かれた社会性」の3項目を挙げている。

実際にはこうした否の打ちどころのない言葉で表現される万能の教師像より、豊かな専門的知識を有し、真剣に学び教えようとする情熱に溢れ、わかりやすく教えてくれる先生に、生徒や学生は敬愛の念を持つ。そして、そうした師と仰ぎたくなる「先生」との出会いは、その生徒や学生にとって生涯の心の糧になる。感覚的ではあるが、ついに行きたいと思われる先生が発するオーラが、教員に望まれる資質・能力ではないだろうか。教育はカリキュラム論より教師論が結局一番重要な要素と言われるのはそれが所以であろう。

さて、学生として直接教わったことはないが、教員になって私の教職人生に大きな影響を与えた先生が二人いる。今では廃刊となった研究社の教育雑誌『現代英語教育』1998年2月号の「この人に賞をあげたい」という特集記事に40名ほどの英語教育関係者の一人として投稿を依頼されたことがある。その時、私は二人の先生の名前を挙げ、賞をあげたいと考える理由を紹介させていただいた。織田稔先生(当時、関西大学文学部教授)と斎藤栄二先生(当時、京都教育大学教育学部教授)のお二人である。

織田稔先生が大阪教育大学教授時代に五島忠久先生と共著で出版された『英語科教育基礎と臨床』(1977、研究社)は、文法規則を公式的に覚えることが中心の学校文法で育ってきた当時の英語教員に、英語ということばの使い方の根本概念を示すとともに、それを分かりやすく教える方法を紹介された書籍で、私にコペルニクス的な気づきを与えた。教室英語において、何が基本であり、どのように臨床にあたるのがよいかを考え直させるものであった。英語に対して限りなく広がる思いと、英語を教える自信を与えてくれたバイブル的な一冊であった。その後、勤務

していた大阪府教育センターに現職英語教員講習の講師としてお迎えしたときに、若い頃に啓発された思いを私は織田先生に告げた。爾来、織田先生からいつも著書を送っていただいたり、未だに学問に勤しまれる姿を見せていただいたり、励ましの言葉をもらったりと親交を深めていただいている。近年、生徒が主体的にものを考え、判断し、表現する力が大切であると言われ、発想力や個性的な表現力の育成が求められている。これらの力は生徒の基礎的な力の上に自分らしさを発揮して生まれるものである。そして、そのような力を育成する創造的な授業は、教員に豊かな基礎力と英語に対する自信がなければできない。織田先生の著書を通して、英語の根本的な概念を得て、英語に対する感性を磨いた教員は数多くいる。

もう一人の斎藤栄二先生の素晴らしさは、励ましの姿勢にある。斎藤先生の著書を読んだり、研修、講演などを受けたりすると、肩を軽くぽんと叩いて「さあー、いってらっしゃい」と教室へ送りだしてもらおうような気がした。斎藤先生から励ましを受けた中・高等学校英語教員は多く、私もその一人である。英語教員には、プロの教師でありながら明日の授業をどう行えばよいか悩んでいる人も多い。自分が学んできたこと、体験してきたことを整理し切れていない。また、マンネリ化した授業にいきづまっている場合もある。斎藤先生はそのような教員に、常に具体的で分かりやすい教材、カリキュラムを提案され、励ましてこられた。おそらく、斎藤先生自身が中・高等学校で教鞭をとられたことがあり、教員の求めている思いが分かるからであろう。私が高校教員であった頃、斎藤先生は毎月一度土曜日に大学の小さな演習室で現職教員向けに「英語の教え方教室」を開かれていた。私は往時の門下生の一人である。その後、大阪府教育センターの指導主事になったのも、その時注目を浴びていたインプット理論を斎藤先生から教わったり、自分が実践している授業の活動をまとめたりすることを薦めていただいたからである。斎藤先生は新しい理論を紹介されるだけでなく、教員と同じ目線の高さで授業の進め方を研究され、教員とともに歩んで来られた。私が大阪府教育センターで英語教科教育の研究や英語教員研修に精魂かたむけ頑張ってきたこと、本学で斎藤先生のように現職英語教員を支援したいと勉強会「英語の教え方教室」をこの7年間開催してこられたのも、あの時に得た思いと感謝が原点にある。

お二人の先生とも第一線を退かれたり、故郷の福島に戻られたりしている。しかしながら、両先生の英語教育への思いは未だに心の糧であり、私の心の中に一筋の炎のように燃え続けている。今年度、本学の定年退職を迎え、この原稿が大阪女学院大学教員養成センターHP英語教育リレー随想に投稿する私の最後の巻頭エッセイになる。私が教職人生の「師」とするお二人の先生を紹介し両先生に感謝の意を表すとともに、教員という道を歩んでいる仲間の先生にそれぞれの方が師と仰ぐ先生の教えを心に、これからも出会う生徒や学生にとって皆さんが良き「教師」であるように教育という炎を心に燃やし続け、これからの英語教育の先を見据えていただきたいという願いを込めてお別れの巻頭言としたい。

最後に、皆様のご支援・ご協力に感謝し、ペンを置きたいと思う。

(なかい・ひろかず 教授/教員養成センター長)
